

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	感情教育待望論（その九）：体質改善としての感情教育 “いじめ”の対処療法は無効 衆愚からの脱出：孤高を教えよ
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 15 : 2 - 9
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045170
Right	
Relation	



体質改善としての感情教育 ”いじめ“の対処療法は無効 衆愚からの脱出

——孤高を教えよ——

上原輝男



1 誰も助けてくれないの？

事実から書き起こそう。去る十二月六日、定期検診のために出かけた。住いに近くの大病院での出来事である。少なくとも、それを変事として、その時診察室にあった私の耳は捉えた。医者も看護婦も、その時、顔色一つ変えなかったのは、その声に聞き覚えがあり、また、それに類したことは常習であったからであろう。それと、その声が子どもの声で、多分男の子で腕白ざかりといったふうに関こ

えるのも、却って安心させていたようにも思う。それに、その声が、同じ場所から、全く移動することなく聞こえて来、一応絶叫に似ているが、それにとまって右往左往する人の気配もなければ、その声の音程も一定していて狂わないのが、外来患者に動揺を与えなかったと思われる。

最初、わめいているとしか聞きとれなかったのが、私の耳に、はっきり、「誰も助けてくれないの！」ということばであることが、確認できるようになると、私は、思うことが急激となった。何ということだ。遂に、現代っ子をここまでにしたか。しかも、周囲の大

人たちは、この声の主にも誰も反応しない。たとえ、それが狼少年であったとしても、これを放置してよいのであろうか。

まわりの人々が、冷静に判断しているのに、私だけが、この声を SOS として反応しなければならぬとそそっかしく思ったわけではない。むしろ、このことばが、「誰も助けてくれないの！」という恨み言の発言である故に、直ちに席をたつて駆けつけねばならぬ性質のものでないことを聞きつけていた。考えようによれば、幼な子が、SOS を恨み言として発言することに、こましゃくれを思わせられて、小生意気さを認めてやりたい気もな

いではない。だが、ここからが、教育者的判断を下せるか否かのわかれ路だと自覚したのである。

現代の常識は、この幼な子の発言に、もうよくもわるくも驚かなくなっている。この発言を、現代の常識が子ども達に生みつけた結果だと思ふ人がいなさすぎるか少なすぎるからである。つまり、子どもの発言なり行動は、現代の教育が如何に行われているのかパロメーターであるとするこの意識のうすさである。

あるいは、知識の獲得を急がせ、その速さだけを測定してそれを成長としてしまう、いわゆる促成栽培的誤認が蔓延したといえないか。

私は広島被爆者の生き残りである。いま原爆話を持ち出すのは、あの阿鼻叫喚の中でさえ、私は一度も、「誰も助けてくれないの!」という叫びは聞いていない。あの修羅の巷で、罹災者は声を限りに助けを求めた。そして、求め得ずして、鬼籍に入った。すでに助け人が居なかったのである。それでも、「誰も助けてくれないの!」などと恨みも呪いも残さずに逝った。例外をあらさまにいうと、苦痛に堪えかねて、「誰か、殺してくれ!」等々の発言は何度も耳にした。しかし、この「誰か、殺してくれ!」の発言と「誰も助けてくれないの!」は、根本的に人間生命の在り方

に対する考え方に相異なる。おそらく、というより、断じて間違ひなく、今、私が耳にした「誰も助けてくれないの!」の声の主は、生死の境をさ迷ってはいないのである。しかも、四、五才の頑是ない童児がこれをいうとは。これで現代教育は正常といえるかどうか。現代人は病んでいる。そして病んでいる自覚がないから、小児感染で、児童が侵され始めた。

2 世論は常に正しいとは限らない

本論は、今日的、緊急を要するいじめに対する教育問題の基調論議を得たいがためのものである。既述の如き発言を三才の童児にらしめるのは、今日における人間存在のありようの根底が示されたものとして、誤りあるまい。そしてそれは、その根底に理由の如何にかかわらず、人間が人間の生死にかかわることを万難を排しても、そのことに奉仕することを最重要視しなければならぬことを強調している。今日、福祉を重要視し、ボランティア活動を賞揚する常識はこれであると思われる。このことは、特別に取り挙げるか、とやかく批難されるべき筋合いはどこにもないほどに、最弱者、即ち、生命の危機及び危惧の切迫者から優先救済されてこそ生命は継

続され、これが優先されない限りでは、死はとり返しのつかない後のまつりたらしめるものだとする考え方である。

この何よりの実例を挙げれば、どんなに交通混雑の渋滞地帯でも警笛を鳴らす救急車の前には、道を開かねばならないのである。

だが、全てにわたって人命尊重は絶対かどうかという点必ずしもそうだとは言いい切れない。たとえば、死刑は極刑だからという廃止運動並びにその行動団体はあるにはあるが、死刑が世界から無くなったわけではない。また臨死問題がまだ明確にならないのも、人間の尊厳死を認めるか否かを含めて、人間個人の意志と生物的生命との脈絡をどこでどう判断するかは現代人の知恵では未決定のままなのである。

ただ、現段階でも、明確で、万人の承認と支持を受けるにちがいないことは、未成年者の自殺と他殺、特に、小中学生の自殺と他殺を何としても阻止し、是が非でも思い止まらせなくてはならないことである。但し、それはそれとして、小中学生の自殺など、昔ならあつてはならない出来事、論外とすべきことでも、今日のように頻繁に日常化するに及んでは、論議を尽して、昔は起きなかったことが、何故、現今は頻発するのかを追究すべきである。

いじめ対応策に八方手を尽し、試行錯誤し、

学校で、P・T・Aで、専門家も、当然、行

政省庁も、マスコミも、真剣に努力していることは、毎日の新聞紙上でもうかがえる。しかし、火がついてしまっただけに、対応策に追われ、根本原因の追及は、悠長な論議のようには思われるらしく、課題とすらならない。それというのも、人命救助、消火活動が、何にもまして、優先されねばならぬ只今は、非常事態という認識もできるが、現代人の体質改善が、元来の教育問題である。本来、いじめの問題は単発的事件処理とは別に、歴史的な日本人の精神を含めた体質の現象結果として捉えられねばならない。

『いじめ しない、させない、みのがさない』右の標語は、本年、十一月二十三日のI君自殺の報道後、数日も経過して、某県「いじめ」対策PTA協議会が、通学児童を持つ各家庭に配布したビラに示したキャッチフレーズである。

内容は、子どもが訴える「いじめ」の具体例を・一、他の子どもへの命令。一、無視といやがらせ。一、言いふらす。と三つに分けて整理し、その下段に「いじめ」をなくすためのポイントを、家庭では、地域では、PTAではと、これまた具体例に丁寧に、簡条書きされて、衆知を集めて、「いじめ」の芽を摘み取り、「いじめ」根絶に向けて」の画期的な運動を推進しようとするものであることが

知れる。

しかし、その処方箋は、徹底を期せば期すほど、ここで私が述べる本論が危惧する大前提を崩しているといわざるを得ない。

「いじめ」は今日では社会問題だといってよい。本論が、その対応策を批判する立場をとるのは、決して、清輝君やI君を見殺しにしてよいと思っているわけではない。しかしこのビラに示されたような「いじめ」根絶作戦だけが奏効するとは思えないし、その内容の文言のはしほしにも、現代社会の風潮に逆らわない大勢順応的紋切り型支配を覗かせるところなども、却って、火事場泥棒的な狡猾なアジテーションとなっていることは、はっきり指摘しておきたい。

民主主義は、「みんな」と言いさえすればオールマイティーだとする体質が、子ども達に「いじめ」を発生させ、真似させる気分を作らせているかもしれないのである。

先述の通り、このビラの「いじめ」をなくすためのポイント」は、「家庭では」「地域では」「PTAでは」とそれぞれにおいて、具体的に、その要領と方法を指令している。一体この指令者は、何者なのか。

なぜ、現代人はいつから、このようなアジテーションを、民主主義ルールに従った民衆運動だと錯覚する習慣をつけてしまったのであろう。戦争中でも、一般国民に、これほど

徹底する、家庭・地域・学校を統括し、浸透した指令書は届かなかった。文中使用する言葉だけが、平和的な、「示す」「うのできる親に」とか「参加を」とか、「連絡を」「協力を」と多く省略形を用いて、命令と気づかせぬために婉曲表現をとりつくろっているだけではないか。

最もひどいと思われるのは、「PTAでは」の欄である。「先生は「いじめ」のサインを見逃さないでほしい。」「先生は子どもの悩みを真剣に聞いてほしい」「担任は「いじめ」を抱え込まないで、他の先生と協力して対応してほしい」「学級は「いじめ」の対応を素早くしてほしい。」「いじめ」に対して、子ども達同士の活発な話し合いの機会を設けてほしい」以下略。

「してほしい」等々で、先生・学校に対する希望事項の列挙ならしめているが、これは、先生・学校不信であると同時に、先生・学校に対する内政干渉と言っても間違いはない。このように苛烈に学校や先生を叱責しても、民主主義国家の教育者はこれを唯々諾々と受け入れなければならないであろうか。ところが、以上の内容は「学校へのお願い」という文言でしめ括られている。「お願い」とは敬語である。これは、もはや侮辱だといわべきである。おまけに、この欄の終りは、活字一号ポイントを大きくして、「いじめ」は

担任や学校だけの責任ではありません。親にも責任があります。……みんな云々」と書き添えられるのだから、よく言ったとしても、叱られたり、慰められたり。一体この発言者は何様だと思っただけであろう。また、近頃の学校教師は、こうまで言われて一体、何をプロとして給料を得ているのか。不思議な職業集団だといわなければならない。むしろ、今となっては、こうまで一兵卒の如くなめられても何も言わない人たちのことを「先生」というのであろうか。それとも給料はこれらの侮辱に対する慰謝料であるのか。

しかも不思議としか言いようのないのは、PTAと先生との関係である。抑々、PTAとは何の略語であったか。なぜ、先生は、PTAの傭兵のように顎で使われねばならないのか。

3 衆愚からの脱出

今の世の中を見て、満足感を持っている者はいるのだろうか。文化の爛熟した時代など、私どもの年齢の者は遂に知ることが出来なかったと思っただけだが。もし、今日がそうだとする人がいるなら、私は率直に言うだろう。これは爛熟ではない。文化の墮落時代にすぎないと。つまり、精神力の衰亡時代であ

らと思うのである。

今にして思えば、戦後五十年の歴史は、今日の精神損失時代へ、誰かが仕掛けた巧妙な陥穿であり誘導であった気がする。

本土決戦まで論議された御前会議は、いまや、いじめ問題に関する関係閣僚会議（平成七・十二・十九）を開く世の中である。一体どちらが本もので、どちらが漫画であろうか。

それでも、戦争よりましで、平和の方を選ぶべきだというのであろうか。戦争でお国のためと思っただけで死んだ若者と、いじめで死ぬ子どもとどちらが悲惨なのか。このような対比は、戦争の経験者である私たち世代の者がしたいことではない。つまり、価値観、世界観が全くちがうものだと思っただけである。

「聞け、わだつみの声」に代表される遺言は、「われら、悠久の大義に死す」であったことを、しまい込んだことを心の奥底から思い起こす。決して、私どもの世代の者は忘れてはならないのである。ただ、違う御時勢になったから、まるで通用しない旧紙幣をほろほろに破ってはいても、お守りのように、肌身から離さなかった。

「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び」と玉音は伝えたが、あれは、戦後の窮乏だけを指していたのであろうか。暖衣飽食時代となったからには、この玉音は遠い昔語りにはすぎないのであろうか。私たち世代の者たちは

忘れていないはずである。

義に生きてきた感覚の持ち主たちが、一夜明けると、個人のために生きよの命題は眉唾としか思えなかった。公職追放、公職資格審査等々によって、旧思想（一括して軍国主義思想と目された）の持ち主は排除され、人物交替は勿論、政治経済、学校教育、家庭生活に至るまで、故意に人心の一新を図ったのは、明治維新よりも激しい世の中の価値基準の顛倒ぶりであった。この時代の老人たちは、殆ど発言しなくなっていた。栄養失調で、日本人が倒れていった時代である。闇市、闇米、闇物資、闇商人、闇とり引き、等々の語が横行したが、それは、政令通り世の表面では生きられない、もう一つの生活の裏面で生きていく証拠を示すことばであった。その闇で生きているどさくさにまぎれて、民主主義のルールは矢継ぎ早やに施行されていったのである。

官製の国家教育主義者の最後尾に近く、原爆の洗礼等受けた教育者の卵は複雑であった。敗戦とは、このように価値観の変更を命じられ、昨日と今日とが断絶されねばならぬものかを、茫然と見つめていた。そして、教育に歴史的とでも言うべき徹底した教育改革が行われてよいものだろうかかと疑念が湧いた。この問題は、いまだに溶けていない。素朴な庶民感情においてさえも、あまりに急激な世

相変化についていけない世代が、「民主主義のはきちがえ」などと、町で多くの人々が、わかったようなわからないようなことばを口にした。

次々と断行されたが、この新教育に抵抗する運動は何一つとしてなかった。衣・食・住の全てに困窮瀕死の状態の国民が、六・三・三制の学制改革に、よく耐えられたものだと、今になって思う。即ち、市町村の疲弊した経済の中で、まがりなりにも、新制中学校校舎を捻り出したものである。

当時、「アメリカかぶれ」ということがあったが、もともと負け犬の遠吠のようにしか聞こえていなかったが、日本中、元来の日本人を忘れる頃には聞かれぬようになったのも、人心の推移を語っている。

もともと、安保闘争の頃には、革命前夜の様相を呈するほどに、民衆のエネルギーは増大し結集を見せるが、評者によれば、戦後日本の通過儀礼であったという人もいる。

先日の新聞紙上で、日教組委員長と文部大臣が、握手して、いじめ対策に協力を誓い合っている写真が出ていた。少なくとも、社会の均衡指図は、天動説から地動説へというほどの変わり方を、好むと好まざるとにかかわらず、味わわされているといつてよい。

私は言いたい。「いじめ」が社会問題になるなど、しかも、いまでは国家の問題ともす

る事態は、どう考えても異常であると。その言い分の根底は何か。「いじめ」は、日本人の生理的劣勢感情の互助的反応が原因であることによる。ところが最近になって、関西の某

大学某助教授が「今までにないいじめの構造が感知されるようになった。それは、いじめの被害者が、その加害者に対して『二セの同意』を示している」と、新聞紙上に六段抜きで報告した。(毎日新聞・平成七・十二・十八)それを見た私たち、戦前、戦中派が、物をいわねばならないと思わせられた。『敵対』ではなく、『合意』の風潮である。『まず、同意ありき』である」とまでいう。私だけでなく、戦前戦中派の者なら、この記事を見て、何を今さらと思うにちがいない。抑々、「敵対」ならば、いじめは起こらないのである。また、加害者も初手から敵対するような者をその対象としないから、いじめが成立する。だから、「弱い者いじめ」という語があったし、「いじめは卑怯者のすること」と蔑視して来た。これがいじめの構造なのであって、この報告者の今までの観察が単純すぎただけで、仮に、この報告者のような子どもがいじめにあったとしたら、必ずや、この報告者の報告通りに「同意」する。これを見て、やっぱり、新しい型の子どもだと思ひ、なおかつ、私の新聞紙上に流した報告は正しかったと思うのだからか。

今、声を大にしていうべきは、「いじめ」に対して、「断固戦え」ということであり、それが「いじめ」を終息させる最も簡単な方法である。

交渉決裂、敵対行為が展開されれば、「いじめ」の雰囲気は醸成されないのだから。「いじめ」と「いじめ」するから「いじめ」で、陰湿行為を嫌悪しながらも、その可虐性に引きずられる感情だから、劣勢、劣等感情と昔より言ってきたのである。論理的には合意・同意かもしれぬが、被害者が、感情的に賛意を示したわけではない。だからこそ、そういう場合を媚び諂ったというのである。

4 教育長の発言許すまじ。 教育は地に堕ちて、 民主主義なのか

某県の教育長からは、暴力的非教育論といわれるかもしれない。(いじめ被害者に死ぬなど呼びかけ、死の誘惑は教育長自身の例を挙げ、しかも、十代後半には結婚という幸福も待っていると述べた。)今の御時勢は、「子どもの側に立つ。弱者に味方する」を常識とする。しかし、教育者の知能まで子どもであり、精神的遅進もしくは精薄である必要はない。本論の最初に記したように、今の子どもは、手を差し延べなければ、「誰も助けてくれないの!」と、己れを顧みるよりも先に、

援助のないことを恨む習性をすりつけてしまったのだから、教育長がまた、「死ぬな！死ななくてくれ！」と声を限りに叫ぶことで、現代の辻褃はあつているとすれば、それはもはや教育ではない。それは卑しい人気取りの大根役者のすることである。

子どもたちはSOSを発信し、教育長は死ぬなど絶叫する。どうして、これを滑稽極まる、教育力が地に堕ちた漫画だという人がいないか。

実際にSOSの発信を聞きつけたら、即刻レスキュー隊に出動願うこと以外にない。教育長がマイクの前に立つのは、救命以外の何か、売名効果を考えているとしたか、その効果測定が出来ない。三重県鈴鹿市の、「いじめによって、十二月二十五日に自殺する。」という電話予告は、やっぱり、小学五年生のいたずらであつたではないか。まさしく漫画時代といわねばならぬ。

今、ここに持ち出すことでもないが、一言言及せざるを得ないのは、教育委員会制度並びに、その都道府県市町村の各教育長なる職制職責の見直しである。と同時に、その行政監督官庁である文部省との関連組織を、国民の前にわかり易く説明すべきである。

学校教員試験を受けた経験者と極めて少ない行政職関係者を除けば、国民の大多数は、この教育委員会なる制度を知らない。

このところ、教育長が入れかわり、自殺予告する子どもに制止を呼びかけるから、全国的に、教育長の存在が身近になった。しかし、教育長とはあの程度の見識の持ち合わせしかない只の人ではないかと、失望した人も多かつたのではあるまいか。ましてや、当の自殺予告の子どもが、あれを聞いて翻意するなど思えない。だいいち、学校長は知っていても、教育長の権威はもとより、どこのおっさん程度にも関心を向けない。

今日、××長という言葉はあつても、これに敬意を払わねばならないという教育は行われていないと考える方が常識なのだ。せいぜい、それが残っているのは、やくざ社会の組長ぐらいであろう。

どうしてこれほどひどい無教育時代になつてしまつたかともう嘆くまい。戦後の教育改革の蒔いた種が実つたのである。あの時、あの時以来、戦中は勿論、戦前教育を否定することが教育として五十年の歳月を重ねたのである。

東大総長の卒業生に贈る訓辞は新聞紙上に掲載され、一年一度にせよ、国民の耳目に、知恵の啓発をうながし、人間の英知に自ずと尊敬の念を覚えしめる、残された貴重な年中行事であつた。大河内一男の「太った豚になるよりも痔せたソクラテスとなれ」は、時の警句としても、記憶している人もまだあると

思う。

次の総長が茅誠司で、訓辞は「大きな親切よりも小さな親切」であつた。以後、新聞には、東大卒業式訓辞は載らなくなった。世の中は平易と通俗化をモットーとし始めた。この頃、「でも、しか先生」という語が流行した。一般市民が主体となつていく社会では、学校という世界で旧態依然として先生稼業をする連中を軽蔑し始めたのである。そのくせ、世相を映す組合活動では、「日教組」が一方の勢力を占めていたのは、良くも悪くも失地回復を願う日本教育集団の生理痛に似ていた。

5 教育の基本とは何か― たかがいじめの態度を 堅持すべし

死の淵に立っている者は、年齢・男女を問わず、事情が何であれ、是が非でも助けねばならぬ。これは自明である。しかし、語つてならぬことは、その理由が「いじめ」だからとも、その根絶という目的のために、世の中大騒ぎしていると思つてはならぬ。少なくとも、子どもたちに、そう思わせてはならぬ。その意味からも、このたびのそれぞれの地域での教育長の呼びかけは疑問を残している。あの程度の言い分なら、素人でも言える。どこに教育長の権威があり、専門性が感じられるといえるのか。

たかがいじめではないか。君はたかがいじめ

にあつて、死のうというのか！教育長ならなぜこのくらしいのことが言えないのか。昔ふうというなら、教育長自身が、腰ぬけ・及び腰であるからである。日本人の昔ふうの意識でいうなら、腰抜けと呼ばれることの屈辱感、他の如何なる意識をも圧倒して雪辱に燃えるのが、日本魂であつた。言うまでもなく、この言い分・この意識の持ち方は、五十年間タブーとされ続けたのである。

『菊と刀』で、戦後まもなく、日本文化は恥の文化とアメリカ人に指摘されながら、日本人は恥をかなぐり捨てて、個人の尊重やら、人権の主張やら表現の自由やらに踊り狂つた。日本人の美德とされた、つつしみ深いとか、おくゆかしいなどというのは、死語になりつつある。今や、露出狂であり、露出というより露悪狂である。

「いじめ」など、陰で、いじいじと、じめじめと行われるものであつた。昔のことばでいうと、女、子どものなすべき卑しい行為であつた。

言っていることは、戦前と同じく、何と硬派的で激烈なことに聞かれるであろう。これは現代と馴染まないといわれることは承知である。しかし、戦前は、なぜ硬派的、激烈であり、戦後はその逆に軟派的・乱雑となるのかの理由を私は知っている。だから、敢えて

言うのである。

今日の暗澹たる教育現状は、既に五十年前の戦後教育スタートの愚かな教育改革が招来したことをわれわれは率直に認めるべきである。一夜にして、墨塗り教科書を用いたとか、皇国史観が廃されたとか、その一面性を思い直しているのではない。民主主義教育とは、教育の尊厳性を認めぬところにあつた。

これは、当時の指導者であつたアメリカを責めるよりも、日本人の早とちりと無知を追究することが先か、そのいずれかは、これからの歴史が証明するだろう。

あれほど礼儀正しかつた日本人が傲慢となり、不道徳となつたのは、主権在民、人権尊重だけを叩き込まれたからである。神風特攻隊の命令者が自分になつただけだと言えないか。暴走族とはオト狂だけの命名ではない。個人の暴走に、現代の歯止めはない。

世の中のこうした狂いに、人々は何とかせねばと思ひ、何とかするためのものが教育だと思ふようになった。つまり、人々は、教育に絆創膏の効果を期待する。所詮、教育とはそういうもの、それ以上のことは考えられないようになってしまつたのである。

民主主義教育とはやっぱり、人間が人間の合議によつて行ふもので、教師は仰がれるものでも、尊敬されるべき聖職でもなくなつていたのである。

「先生」という呼称は戦後教育においては、僭称であつたことになる。「教職手」「学校夫」ぐらいが一般の誤解を受けることなく妥当であつたかもしれない。これは、現代の現場教師を侮辱し軽蔑しているのではなく、教育法規に照らしてみても言うのであつて、戦前的意味合いにおける教牧としての「先生」に与する内容の職責内容はどこにも見当たらないのである。

いじめの問題にしても、騒いでいるのは、学校長初め教育委員会、今の現場教師の対応が遅いように思われるのは、案外、学校教師は、指令待ちする兵卒的身分であることをわきまえているからである。とても独断専行、率先垂範が当然とされたかつての「先生」を想定されても、法規的には越権であるが、そればかりか、もはやそれを歓迎する土壌ではないことを知るべきなのである。

6 タブー 禁忌という感情教育の 基本を堅持すべし

前述の通り、今や世間は、学校教育にその多くを期待しようとはしなくなつてゐる。もっと痛切に言えば、学校教師に全てを任し切れなくなつてしまつた。このことは、このように為政者は指導してきていたともいえる。平成八年一月十一日付毎日新聞社説では、「学

校の存在をもっと軽いものに」という小見出しをくつつけて示唆する時代となっている。

一体、学校はどこへ行ってしまおうのである。一体、義務教育とは何の義務なのである。一体、教員免許とは何を免許されているのであろう。

もはや、混乱・紊乱・放縦……。もう、なるようになるのを待っている、まさに世紀末の現象を写している。

決して自分たちがと言わないが、少なくとも日本民族は過去の歴史の中で、他民族からもその生活文化の継承の特異さを見ごたとも美しいともされた人種であったのに、今日の如き教育の実情では、それが保証はできそうもない。

人権を尊重し、個性の自由をうたって、滅びるなら日本国も日本国民もまた瞑すべしというのであろうか。落日・滅亡の景色には人類の共感があるのに、只今の我が国の衰亡の予感にはそれすらない。

『学校は滅んだ』という名の書物が出版されたのはもう十年以上も昔になる。今や「教育が息を引き取った」というべきかもしれない。

起死回生を如何にすべきか。

人工呼吸法の応急手当とは言わない。人権をいうよりも前に、個性よりも前に、人が教育を欲した根元的理由を考えることだ。戦後

教育は戦前教育の否定から始め、方便のための教育であった。そのために教育の絶対的尊厳をかなぐり捨てた。

心を落ち着け、耳を澄ませよう。自分が聴こうとせず、われわれ先祖以来、何を交らぬものとして聴きつけて来たかを静かに耳を傾けてみよう。まだ聴こえる筈である。正しくは、生命存続の証拠として教育がとらえられるから、その絶対的尊厳性を保つのである。

現代教育学は、余りに多くの無用の教育を言い過ぎていた。先哲は知っている。

孟子曰、人之患、在好為人師。

——離婁章句上——

編集部註1（上原先生の座談より）

人は、いつでもだれかの先生になりたがる。しかし何でも教えてやろうという姿勢はだめである。そのような先生になろうとしたがるのは、困ったことだ。

絶対不可欠の教育とは何か。

孟子曰、人有不_レ為_レ也。而後可_ニ有_レ為_レ也。

——離婁章句下——

編集部註2（同）

やってはならぬことは、やってはいけない。その次に、何をやるべきかを考えなさい。まず、タブー（禁忌）を教えよ。それ

が分かれば、何をすればよいか分かるものだ。

儒家の中で、最も義を説いたのは孟子である。おそらく、松陰が、あの激動の世に、弟子たちに告げたかったのは、孟子の義ではなかったらうか。

いわゆる根本義である。右往左往することなく、急がず、遅れず、日々、堯として、鼓腹撃壤するのは、人々が悠久の大義を歩んでいる自覚があるからである。

何も悠久の大義とは、往年の大戦争中の死語ではなかったのである。

会津日新館の生活訓として、「什のおきて」は、「感情教育待望論」（その一）でも既にとり挙げたが、八か条の全てが禁止条文で、その地域によって多少の順序に異同はあるが、最後の条項は以上をとりまとめるように、「ならぬことはなりませぬ」と結ぶ。禁忌の絶対を守ることが全てに優先する教育を行っているといえる。

孟子に言わすれば、これが出来てこそ「それぞれがそれぞれの仕事が出来ると」言っているのである。

それを「義」というのである。

（平成八年二月・記）

（冒頭写真撮影 村山寿）